

日本研究発信の〈場〉

徳 永 光 展

要 旨

研究者がそれぞれの研究分野を進化発展させる中で、所属学会を越えた幅広い活動を志向し得る場をグローバルな視野で求めた際に、その受け皿となり得る場にはどのようなものが存在するのであろうか。本稿では日本語での活動を広く受け入れている雑誌と世界各国で開催されている国際シンポジウムの現況について概観し、関係各位の参考に供しようとするものである。

キーワード：日本研究・投稿誌・学会・国際シンポジウム・口頭発表

1. 問題の所在

通常、人文社会科学系の研究者は、所属学会の学会誌への投稿とその学会での口頭発表に加えて出身大学や勤務大学で発刊される学術雑誌乃至は研究紀要への論文発表を中心に活動しているものである。しかしながら、研究が進み、分野越境的になってきた場合には、成果の発表機会をより多様な場に求めることで、新たな研究者や論文の読者にも出会い、研究の新局面が開かれていくこともあるのである。そういった意味で、ここでは論文の投稿資格や口頭発表者の資格に関しては比較的緩やかに開かれている場を国内外に探し求めてみることにしたい。

2. 雑誌の概況

まずは、日本国内で発刊されている雑誌についてであるが、以下は投稿資格を問わず、日本語で書かれた論文を広く受け付けているものである。古いものでは日本語・日本文学分野の「国語と国文学」(東京大学国語国文学会)と「国語国文」(京都大学文学部国語学国文学研究室)、それに日本史や日本民俗学などの分野をも網羅する「國學院雑誌」(國學院大學)が有名である。しかしながら、近年では発表の場は確実に広がってきている。日本研究全般を受け入れるもので言うと、「日本研

究」(国際日本文化研究センター)、「JunCture 超域的日本文化研究」(名古屋大学大学院人文学研究科附属超域文化社会センター)、「東北アジア研究」(東北大学東北アジア研究センター)、「日本語・日本学研究」(東京外国語大学国際日本研究センター)、「人文」(学習院大学人文科学研究科)、「北東アジア研究」(島根県立大学北東アジア地域研究センター)、「立命館アジア・日本研究学術年報」(立命館大学アジア・日本研究所)といったところが挙げられる。また、海外の日本研究につき概況を記録する雑誌として日本語または英語での投稿を受け付けている雑誌に「世界の日本研究」(国際日本文化研究センター)がある。また、もともとは自大学出身者を対象に始まったものが一般にも投稿者を認める形に発展した雑誌として、「京都大学国文学論叢」(京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室)や「弘前大学大学院地域社会研究科年報」(弘前大学大学院地域社会研究科)などを挙げるができる。

海外に目を向けると、日本語論文掲載可能という雑誌はアジア圏に集中している。韓国に目を向けると、「日本批評」(ソウル大 日本研究所)のように韓国語で発刊され、日本語により提出された原稿で編集委員会が掲載可としたものについては、韓国語に翻訳された後に掲載されるというケースがある。同研究所はこの雑誌以外にSeoul Journal of Japanese Studiesという英文雑誌も別途刊行している。それ以外では、「跨境／日本語文学

受付2022年11月21日

研究」(高麗大學校グローバル日本研究院/東アジアと同時代日本語文学フォーラム),「日本研究」(高麗大學校グローバル日本研究院),「日本研究」(中央大學校日本學研究所),「日本研究」(韓國外國語大學校國際地域研究センター日本研究所),「日本研究」(釜山大學校日本研究所),「日本學」(東國大學校文化學院日本學研究所),「日本学研究」(檀國大學校日本研究所),「比較日本學」(漢陽大學校日本學國際比較研究所),「翰林日本学」(翰林大學校日本學研究所)といった雑誌が韓国語または日本語で執筆された論文を受け付けている。

台湾には、日本語論文掲載を認める雑誌が数多く存在する。順に挙げてみると、「台湾日本研究」(台湾日本研究學會),「台大日本語文研究」(台湾大學文學院日本語文學系),「外國語文研究」(政治大學外國語文學院),「政大日本研究」(政治大學外國語文學院日本語文學系),「人文研究期刊」(嘉義大學人文藝術學院),「臺中科技大學應用語文學報」(臺中科技大學語文學院),「東吳外語學報」(東吳大學外國語文學院),「東吳日語教育學報」(東吳大學外國語文學院日本語文學系),「淡江外語論叢」(淡江大學外國語文學院),「淡江日本論叢」(淡江大學外國語文學院日本語文學系),「輔仁學誌:文學與語言學」(輔仁大學外語學院),「日本語日本文學」(輔仁大學外語學院日本語文學系),「中日文化論叢」(中國文化大學國際暨外語學院日本語文學系),「銘傳日本語教育」(銘傳大學教育暨應用語文學院應用日語學系),「人文社會學報」(世新大學人文社會學院),「世新日本語文研究」(世新大學人文社會學院日本語文學系),「通識教育與多元文化學報」(世新大學人文社會學院),「中華日本研究」(中華大學人文社會學院應用日語學系),「真理大學人文學報」(真理大學人文學院),「多元文化交流」(東海大學文學院日本語文化學系),「靜宜語文論叢」(靜宜大學外語學院),「大葉應用日語學報」(大葉大學外語學院應用日語學系),「南台人文社會學報」(南台科技大學人文社會學院),「高大人文學報」(高雄大學人文社會科學院),「語文與國際研究」(文藻外語大學)といった雑誌が中国語(繁体字)または日本語で執筆された論文を受け付けている。

一方、中国には日本研究の雑誌は数多く存在しているのであるが、執筆言語は中国語となっている。唯一、中国における日本研究の雑誌で日本語

でも投稿可能なものは、「日本学研究」(北京日本学研究中心)である。同誌は中国語(簡体字)または日本語での論文を受け付けている。

続いて、東南アジアの地域に目を向けてみると、タイでは、「日本研究論集(Japanese Studies Journal)」(チュラロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座/大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻)が日本語による論文発表の場であるのに対して、「Japanese Studies Journal」(タマサート大学東アジア研究所)はタイ語、英語、または日本語での論文を掲載するという形で差異化が図られている。ベトナムでは、「Tạp chí Khoa học Ngoại ngữ», Trường Đại học Hà Nội(「外国語学雑誌」ハノイ大学)がベトナム語だけではなく、英語や日本語も含めた諸言語での投稿を受け付けている。ハノイ大学は旧ハノイ外国語大学が発展して現在に至っているため、各言語の原稿に対応し得るのである。

ヨーロッパにも、少数ながら日本語論文を受け付ける雑誌は存在する。「Analecta Mipponica」(Journal of Polish Association for Japanese Studies/ポーランド日本研究協会)は英語または日本語で論文投稿できる場となっている。また、「BUNRON: Zeitschrift für literaturwissenschaftliche Japanforschung」Institut für Japanologie, Zentrum für Ostasienwissenschaften, Ruorecht-Karls-Universität Heidelberg(「文論 日本文学研究ジャーナル」ハイデルベルク大学東アジア研究センター日本研究所)は2014年に創刊されたインターネットジャーナルで、執筆言語は英語、ドイツ語、フランス語、または日本語となっている。

3. 口頭発表の場

諸外国に目を向けると、英語または日本語での発表を認める国際的な団体として、まずはEuropean Association for Japanese Studies(EAJS/ヨーロッパ日本研究協会)に触れておくべきであろう。この団体は、これまで、ヨーロッパ各地でほぼ3年に一度のペースで国際大会を催してきた。オックスフォードとロンドンで第1回大会(1973年)が開催された後、チューリッヒ(1976年)、フィレンツェ(1979年)、デン・ハーグ(1982年)、パリ(1985年)、ダラム(1988年)、ベルリン(1991年)、コペンハーゲン(1994年)、ブダペスト(1997年)、ラハティ(2000年)、ワルシャワ(2003年)、

ウィーン(2005年), レッチェ(2008年), タリン(2011年), リュブリャーナ(2014年), リスボン(2017年)で回を重ねた。2021年は、インターネットのZoom機能を使ったオンライン会議を余儀なくされたが、今回はヘント(2023年)での開催が決まっている。その一方で、同時にヨーロッパでの開催の間となる年に日本会議を京都大学(2013年), 神戸大学(2016年), 筑波大学(2019年)でも開いてきた。現在、事務局はベルリン自由大学に置かれている。発表に際しては英語での要旨提出が求められる。

一方、東南アジアではJapanese Studies Association of Southeast Asia (JSA-ASEAN/東南アジア日本研究協会)が設立され、2年に一度のペースで大会を開いている。シンガポール(2006年), ハノイ(2009年), クアラルンプール(2012年), バンコク(2014年), セブ(2016年), ジャカルタ(2018年)と続き、2021年はオンラインでの開催となった。

アジア未来会議(渥美国際交流財団関口グローバル研究会)は、日本留学の後に帰国した研究者が集い、研究成果を発表する場を設けることを目指して活動している。バンコク(2013年), デンパサル(2014年), 北九州(2016年), ソウル(2018年), マニラ(2020年), 台北(2022年), バンコク(2024年)とアジア各国での開催を続けている。

1つの大学が主催する例としては、ルーマニアのブカレスト大学日本研究センターが毎年春にシンポジウムを行い、英語または日本語での研究発表を募集してきているケースなどを挙げることができる。このシンポジウムは既に12回の開催を数えるまで継続してきている。同じくブカレストでは、ディミトリー・カンテミール・キリスト教大学(“Dimitrie Cantemir” Christian University)の外国語・外国文学部日本語学科が“Japan: Premodern, Modern, and Contemporary”(日本:前近代・近代・現代)と名打った国際会議を9回にわたって開催している。また、ポーランドではワルシャワ大学、クラクフ大学、アダム・ミツキェヴィチ大学などがこれまで英語と日本語を発表言語とする国際シンポジウムを主催してきた。

続いて、発表言語を日本語のみに設定している会議について述べる。

日本国内では、毎年開催の国際日本文学研究集会(国文学研究資料館)が主として若手の外国人

研究者による日本語での口頭発表並びにポスター発表の機会を設けたものとして歴史を持っている。2022年には既に第45回目を数えているが、この集会の様子は「国際日本文学研究集会会議録」が発刊されてきたことにより手に取ってみることができる。現在では、この会議録発刊に代わる役割を「国文学研究資料館紀要」(国文学研究資料館)が担っている。国際日本文学研究集会での口頭発表者は口頭発表内容に基づいた研究論文をこの雑誌に投稿できるようになったからである。

ヨーロッパ日本研究協会や東南アジア日本研究協会における国際的な連携を見据え、東アジア地区でも同様の実践を模索して始められた会議が東アジア日本研究者協議会(East Asian Consortium of Japanese Studies/EACJS)である。仁川(2016年), 天津(2017年), 京都(2018年), 台北(2019年), ソウル(2021年, オンライン), 北京(2022年, ハイブリット)と継続した活動を行っている。東アジアと同時代日本語文学フォーラムは、日本・韓国・中国・台湾・香港の研究者間でのネットワーク作りを目指すものとして、韓国の高麗大大学校グローバル日本研究院に事務局を置いて活動している。シンポジウムの開催は、ソウル(高麗大大学校, 2013年), 北京(北京師範大学, 2014年), 台北(輔仁大学, 2015年), 名古屋(名古屋大学, 2016年), ソウル(高麗大大学校と東國大大学校, 2017年), 上海(上海外国語大学, 2018年), 台北(政治大学と東呉大学, 2019年)を経て、2021年は全面オンライン、2022年は北京日本学研究中心にて対面とオンラインを併用する形で開催された。

日本語教育グローバルネットワーク(Global Network for Japanese Language Education/GN)による大会は1998年の「地球時代の日本語教育ネットワークキング」(日本)に始まり、1999年「ATJ日本語教育国際セミナー」(アメリカ), 2000年「日本語教育国際シンポジウム」(韓国), 2002年「東アジア日本語教育シンポジウム」(中国)の後、東京(昭和女子大学, 2004年), ニューヨーク(コロンビア大学, 2006年), 釜山(釜山外国語大大学校, 2008年), シドニー(シドニー大学とニューキャッスル大学, 2009年), 台北(政治大学, 2010年), 天津(天津外国語大学, 2011年), 名古屋(名古屋大学, 2012年), シドニー(シドニー工科大学, 2014年), デンパサル(ウダヤナ大学, 2016年),

ヴェネツィア（ヴェネツィア・カフォスカリ大学、2018年）と回を重ねた。台北と天津では「世界日本語教育大会」、それ以外では「日本語教育国際大会」と名打っているが、英文での名称は共に International Conference on Japanese Language Education (ICJLE) であり、その名の通り各国の日本語教育関係者が集う大規模な世界大会となっている。ここでは、分科会の1つに日本研究のセクションが設けられており、文学や文化研究に対する発表の受け皿を提供している。現時点で日本語教育グローバルネットワークに加盟している団体は、日本語教育学会、韓国日本學會、台湾日本語教育學會、中国日語教学研究會、香港日本語教育研究會、Japanese Language Teachers' Association in Singapore (JALTAS/シンガポール日本語教師の会)、Asosiasi Studi Pendidikan Bahasa Jepang Indonesia (ASPBBI/インドネシア日本語教育学会)、Japanese Studies Association of Australia (JSAA/オーストラリア日本研究協会)、Japanese Studies Aotearoa New Zealand (JSANZ/ニュージーランド日本研究学会)、American Association of Teachers of Japanese (AATJ/全米日本語教育学会)、Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE/カナダ日本語教育振興会)、Association of Japanese Language Teachers in Europe (AJE/ヨーロッパ日本語教師会)の12団体である。

1つの組織が主催するものにも触れよう。中国では延辺朝鮮自治区にある延辺大学が2009年より中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウムを6回にわたって開催している。また、中国では、大連外国語大学や大連大学、北京日本学研究中心などでも国際シンポジウムの開催が重ねられている。

台湾では、臺灣大學文學院日本語文學系が日本語文創新国際學術研討會を毎年開催してきているほか、東呉大學外國語文學院日本語文學系が台湾で唯一の日本語教育に関する大学院博士課程を開設している教育研究機関として日語教學國際會議を開催するなど、日本語・日本文学・日本語教育を主なテーマとした国際会議は少なくない。

タイ国日本研究国際シンポジウムは、バンコクのチュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座が開催してきた。会議言語は日本語（翻訳のセクションのみ日本語と英語）とし、2007年

に第1回目が開催された後、2010年、2014年、2018年と回を重ねている。

一つの言語地域内における学会ではあるが、現地語または日本語を会議言語としている学会としては、Japanese Studies Association of Australia (JSAA, オーストラリア日本研究協会/英語または日本語で発表)、Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil (CIEJB, ブラジル日本研究国際学会)兼・Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa (ENPULLCJ, 全伯日本語・日本文学・日本文化大学教師学会) [共催でポルトガル語または日本語で発表]、中国外国文学学会中国日本文学研究會 (中国語または日本語で発表)、Gesellschaft für Japanforschung e.V. (GJF/ドイツ語圏日本研究学会)による Deutschsprachiger Japanologentag (ドイツ語圏日本研究者会議/ドイツ語または日本語で発表)、韓国日本研究團體、韓国日本研究總聯合會 (共に韓国語または日本語で発表) などがある。また、香港では、香港日本語教育研究會が国際日本研究・日本語教育シンポジウムを開催してきている。このシンポジウムには、主として日本語教育関係者が集うが、狭い意味での日本語教育にとどまらず、日本研究全般に関する発表を認めている。会議言語は、日本語、英語、または中国語となっている。

一組織としては、ハノイ国家大学外国語大学、ハノイ大学日本語学部、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学、カイロ大学文学部日本研究センターなども現地語と日本語によるシンポジウムを数次にわたって開催してきている。

使用言語を英語としている団体としては、まず Association for Asian Studies (AAS/アジア研究協会)を挙げるべきであろう。この団体は、北米における最大のアジア研究に関する学会組織で、毎年3月に年次大会が開催されている。日本研究も数多い。その下部組織として日本における英語での発表の場を提供しているのが Asian Studies Conference Japan (ASCJ/日本アジア研究会)である。この組織は1997年に設立され、1999年にAASに組み込まれた。以来、年次大会を開催して今日に至っている。また、AASはアメリカ国内に地区毎の支部を持っているが、加えてアジア地域ではAAS-in-Asiaを開催するようになった。2014年のシンガポール国立大学における大会を皮切り

に、中央研究院(台北/2015年)、同志社大学(京都/2016年)、高麗大(ソウル/2017年)、アショカ大学(デリー/2018年)、タマサード大学(バンコク/2019年)と続き、2020年にはオンラインで開催されている。

一方、アフリカでは、African Association for Japanese Studies(アフリカ日本研究協会)がナイジェリアのイバダン大学に事務局を置いて活動している。また、北欧4ヶ国にあっては、Nordic Association of Japanese and Korean Studies(北欧・日本韓国研究協会)が組織され、3年に一度、大会を催している。イギリスには、British Association for Japanese Studies(BAJS/英国日本研究協会)が活動しており、3年毎に開催の国際シンポジウムに加えて、British Association for Chinese Studies(英国漢学協会)、British Association for Korean Studies(英国韓国学協会)と合同で、Joint Asian Conference(合同アジア会議)をも2016年にはロンドン大学アジア・アフリカ研究学院で、また2019年にはエディンバラ大学で開催するようになっていった。その他として、イスラエルでは、לימודי יפן האגודה הישראלית (Israeli Association for Japanese Studies, IAJS/イスラエル日本学会)が設立をみた。

これらの国際学会にあって、発表に際して会員になる必要があるのは、EAJS, AAS, CIEJB兼ENPULLCJであるが、他は非会員でも割り増し料金の支払いなどにより発表資格が得られることが多く、縛りは緩やかである。特に資格にはこだわらない会も多いので、研究テーマに応じて相応しい発表の機会を求めることは世界的な規模で可能と言えよう。

なお、参考までに付け加えておくと、上述以外のヨーロッパ圏では、Société française des études japonaises (SFEJ/フランス日本研究学会)、Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi (AISTUGIA/イタリア日本研究学会)、Ассоциация японоведов(日本研究者協会〔ロシア])など会員制の学会が存在するが、当該国言語での研究発表となっている。但し、ロシアの日本研究者協会はジャーナルに関してはRussian Japanology Reviewと名打った英文雑誌も刊行していることを付記しておきたい。

4. 結語

以上、本稿では日本に関する人文社会科学関係の研究成果を発表できる場を国内外に広く探し求めてみた。グローバル化が進む今日では、英語による研究発表の場にどう関わっていくかが問われるようになってきてはいるが、日本語による発表の場もアジア地域を中心に数多く存在する状況を紹介し得たであろう。当該地域言語での発表、日本語での発表、英語での発表と研究言語は入り乱れるが、日本人研究者といえども、日本語による研究を海外で発表したり、外国語で発表された日本研究の成果に学んだりもしていけば、自ずと比較文化研究への視野を得る結果となり、研究を刷新できる視点を得ることもつながる。

かつては、他国の言語文化研究はその当該言語を主専攻とする研究者に委ねられてきたが、今では日本が世界からどのように見られているかという点にも目を注ぎつつ、文化の相互理解を果たす中で世界の諸地域との間における平和友好が達成されていくことが切に期待されるようになってきている。よって、日本人で日本国内の地域文化を対象として教育研究活動を行う立場にある者も、日本語非母語話者である外国人の研究者が日本語や英語で産出した研究成果に触れることで、無意識的に自明と考えていた研究の前提が覆され、新たなパラダイムの創出へと進化・発展させた知の体系を創造する可能性もあると言うべきであろう。また、世界各地域の言語文化を専攻する日本人研究者も当該言語圏で日本がどのように紹介されているかという情報にもアンテナを張り、その知見を日本語で書き換える作業にも従事する中で、日本人の日本研究者との間に分野横断的な研究のネットワークを構築して、狭い地域を越境した超域的な文化研究に参画することも可能なのである。

日本に関する研究は日本語母語話者である日本人でなければできない、などという立場が偏見であることは、海外の研究成果に学ぶ中でこそ真に発見することができる。また、海外の研究者に自らの研究を分かってもらえる努力を継続する過程で日本人研究者は自らの研究対象に特殊性が存在するのであれば、それが一体どのようなものであるのかという点についても凝視することができるのである。その作業に価値を見出すことこそ、

各自が根差す文化を尊重する姿勢を育む結果にもつながっていく。そのような人の輪が広がることは、世界の安定に確実な貢献をするであろう。